岐阜がつながる 中山道ぎふ17宿 歩き旅

伏見宿（ふしみ）～御嶽宿（みたけ） 約4.8km

中山道ぎふ17宿とは?

江戸時代に整備された五街道の一つである中山道は、江戸と京都を結ぶ重要な街道で、全長135里32丁（約534km）に69の宿場が置かれました。そのうちの17宿、126.5kmが岐阜県の美濃地方を東西に横断しており、今も往時の面影を色濃く残しています。その土地の歴史や文化、隠れた魅力の発見を楽しむ街道観光は岐阜県の誇るべき観光資源であるとして、平成25年2月に「岐阜の宝もの」に認定されました。

伏見宿

本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠29軒で、宿並みは6町余り。もともとは本来の宿と宿の間をつなぐ「間（あい）の宿」でしたが、木曽川の渡し場の移動で土田宿（どだしゅく）（現可児市土田）が廃宿となったため、元禄7年（1694）に新設されました。この宿で有名なのは、当時珍しいペルシャ産のラクダが伏見宿内の旅籠「松屋」に滞在したという記録。見世物興行の道中に立ち寄ったラクダに、2日間で2,000人が集まり盛況だったとか。

中山道ゆったり伏見宿

伏見宿案内施設。
10:00～15:00　火・木・土・日曜休館

みたけ華ずし　Topics

地元のお母さんたちが「御嵩町に新たな郷土食を！」と開発した飾りずし。巻き寿司をカットすると牡丹やバラ、ささゆりの花が現れます。宿場内でみたけ華ずしづくり体験も出来ます。

願興寺（蟹薬師）

弘仁6年（815）、伝教大師（最澄）が施薬院を建立し、薬師如来像を安置。長徳4年（998）、一条天皇勅願により、七堂伽藍が完成。寺名を願興寺としました。四天王、十二神将の像が揃うほか、運慶作といわれる阿弥陀如来坐像・立像など、平安・鎌倉の仏像が数多く安置されています。縁起によれば、京を追われた一条天皇の皇女が、この寺で尼となった折、災いが起こり、これを読経により鎮めたとき、蟹に囲まれた金色の薬師如来像が現れたという言い伝えがあるそうです。

鬼の首塚

鎌倉時代、現在の鬼岩近くに棲みついていたのが、不破の関（現在の関ケ原）生まれといわれる「関の太郎」。神出鬼没で不思議な術を使い、鬼のように恐れられ、市場で暴力を振るいました。町の人たちは正治元年（1199）、地頭職の交告源吾盛康（こうけつげんごもりやす）に退治するよう頼みました。盛康は源頼朝の家臣で、京都で院の警備に当たっていたので、4人の家来を帰らせて町の警備をさせました。しかしそれでも捕まえることはできず、4人は御嶽の願興寺（蟹薬師）の本尊・薬師如来に祈りました。

ある晩、「既に関の太郎を縛っている」という夢のお告げがあり、薬師如来のお力で怪しい術が使えなくなった関の太郎は討ち取られてしまいました。さらに二度と生き返らないようにと、体をバラバラに切断して、胴は大庭の東に松と樫の木を植えて胴塚として、手は西田の団地の東北に桜の木を植えて手塚として葬られました。鬼岩公園から松野湖に行く道路沿いの岩の下にあった池が首洗い池だといわれています。その首を首桶に入れ、検分のため京へ運ぼうとしましたが、2町（約200メートル）ほど行くと急に重くなって持てなくなりました。仕方がないので道のそばに置くと、鬼になった首が桶を破って飛び出し、檜の根元に落ちたので、そこに埋めて塚を作り、鬼の首塚としました。

御嶽宿

多くの仏像を所蔵する蟹薬師・願興寺の門前宿（町）。当時28軒の旅籠があり、600人の人口があったとか。江戸時代、東に向かう道程でこの後に続く細久手宿、大湫宿など険しい山道ルートに向かう難所を控えた最後の休憩場所として、旅人が多く逗留した宿場でした。中山道みたけ館内の郷土館では、御嵩町が宿場になる以前の縄文時代から近世に至る歴史的出来事の数々も知ることができます。地方の小さな町が、時として全国的に影響を及ぼす重要地点だったという歴史など、知れば知るほど興味が深まりそうです。